

今週の為替相場見通し(2016年10月3日)

総括表		先々週および先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		100.09 ~ 101.84	101.42	99.50 ~ 104.00
ユーロ	(ドル)		1.1154 ~ 1.1280	1.1245	1.1180 ~ 1.1380
(1ユーロ=)	(円)		112.25 ~ 114.18	114.00	112.50 ~ 115.50
英ポンド	(ドル)		1.2916 ~ 1.3059	1.2980	1.2850 ~ 1.3050
(1英ポンド=)	(円)	*	129.64 ~ 132.44	131.50	130.50 ~ 133.00
豪ドル	(ドル)		0.7588 ~ 0.7711	0.7661	0.7500 ~ 0.7800
(1豪ドル=)	(円)	*	76.19 ~ 78.18	77.62	76.00 ~ 78.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 橋 雄史

(1)今週の予想レンジ: 99.50 ~ 104.00 円

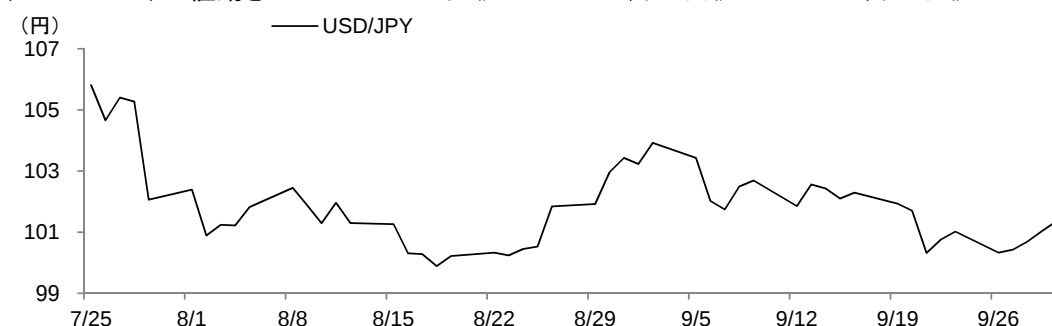
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、週前半は月間安値を更新するも週後半は値を戻す展開。週初26日、100円台後半でオープンしたドル/円相場は、前週末にメルケル独首相が独最大手銀行の支援要請を見送る決定との一部報道を受けてリスク回避姿勢が強まり、100円台前半まで下落。翌27日は、米大統領選候補者の第一回テレビ討論会を前にドル/円は週安値100.09円をつけたが、民主党のヒラリー・クリントン氏が優勢との見方を受けて日経平均株価が下げ幅を縮小すると、ドル/円は100円台後半まで上昇。28日は、OPEC会合での減産合意が関係筋から伝わると、原油価格が上昇し、NYダウ平均も上昇する展開にドル/円は100円後半まで上昇した。29日は前日の流れを引き継ぎ、ドル/円は101円台前半まで値を上げ米4~6月期GDP(3次速報)の結果が好感されると、週高値101.84円まで上昇。しかし、独最大手銀行を巡る懸念が熾ぶる中、その後はリスク回避の円買いが強まり、ドル/円は101円を割り込む。30日は月末絡みの円転フローから上値重く推移し、海外時間には独最大手銀行の信用不安が高まり、ドル/円は軟調推移となった。その後、米司法省の制裁金額が大幅に減額されるとの報道を受けて株式市場が上昇すると、ドル/円も堅調推移となり、結局101円半ばまで値を戻して越週となった。

今週のドル/円相場は重要指標の発表を前に神経質な展開を予想する。前月の日銀金融政策決定会合とFOMCを概ね順調にこなし、ドル/円の値動きは落ち着きを見せている。市場の関心は11月の米大統領選と米国の年内利上げにあるが、米大統領選については、先週のテレビ討論会を終えても民主党のヒラリー候補が優勢との見方は変わらず、マーケットの反応は限定的となった。米金融政策の先行きについても、イエレンFRB議長をはじめとして、複数のFRB高官が年内利上げを示唆していることもあり、目先ドルを大きく売る材料に乏しく、ドル/円は方向感を見出せない日々が続いている。今週は7日(金)に9月雇用統計が発表されるほか、5日(水)に9月ADP雇用統計、9月ISM非製造業景気指数など、年内利上げを検討する上で重要な指標が発表される。加えて4日にはIMFの世界経済見通し発表、6日にはG20開催など、今後の景気の方向感を占う上でも重要イベントが多数ある。足許のドル/円は全般的に動意に乏しい状況が続いているが、上記結果が今後のドル/円の方向感を決める可能性も十分にあり、レンジ相場を主眼に置きつつも、各イベントの結果を受けた相場動向には注意を払っておきたい。

(3)先週末までの相場の推移

先週(9/26~9/30)の値動き: 安値 100.09 円 高値 101.84 円 終値 101.42 円



2. ユーロ

為替営業第二チーム 島田 貴章

(1) 今週の予想レンジ: 1.1180 ~ 1.1380 112.50 ~ 115.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

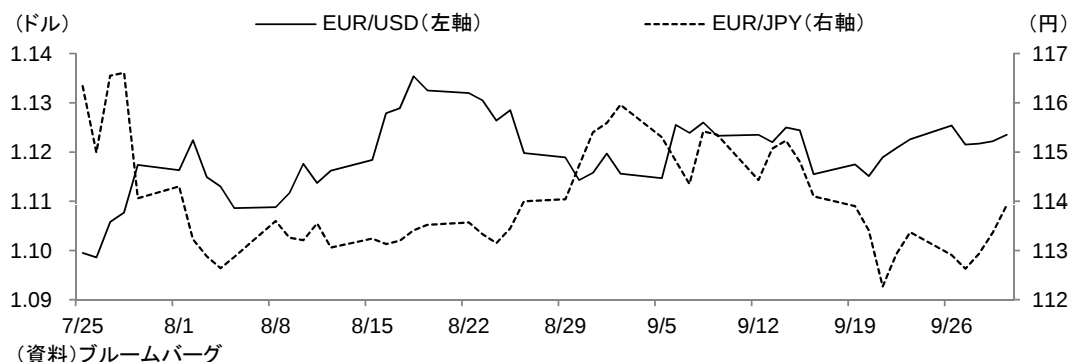
先週のユーロ相場は独大手金融機関に関する報道を材料に下に往って来いの展開。週初26日、ユーロ相場は1.12台半ば水準にてオープン。独大手金融機関の住宅ローン担保証券(RMBS)販売を巡る米司法省への制裁金支払い問題に関連し、独政府による公的支援実施の可能性を否定する報道が週末にされた。これを受け株式市場が軟調推移となるも、同日時点でのユーロ相場への影響は限定的。欧州時間に発表された独9月IFO企業景況感指数の事前予想対比良好な結果を背景に、ユーロ相場は週高値となる1.1280まで上昇。翌27日、日本時間には米大統領選候補者によるテレビ討論会が実施され、民主党クリントン氏優勢の展開に金融市場はリスクオン地合いに転ずるも反応は一時的にとどまった。一方で欧州時間には欧州株式の軟調地合いが継続し、ユーロ相場は1.12ちょうど近辺まで水準を下げる。週央28日、イエレンFRB議長による議会証言がタカ派的内容であったことからユーロ相場は一時1.11台まで水準を下げるも反応は長続きせず。翌29日、財務問題が懸念される独大手金融機関に対し一部顧客がデリバティブ取引用に預け入れていた担保資産を引き揚げたとの報道がなされる中、ユーロ相場は1.12台前半にて推移。週末30日、前日の独大手金融機関に関する報道を受け軟調地合いにあった株式相場を背景にユーロ相場は一時週安値となる1.1154まで下落。しかしながらその後、住宅ローン担保証券販売に係る制裁金について米司法省との減額合意が近いとの報道がなされ、ユーロ相場は反発。1.12台半ばまで水準を戻し越週した。一方、対円では週初26日に113円台半ばにてオープン。レンジでの揉み合い推移が続き、27日に安値112.25円、29日に高値114.18円をつけた後、114.00円にて越週した。

今週のユーロ相場は底堅い展開を予想する。先週注目を集めた独大手金融機関に関連した問題は、週末に米司法省との制裁金減額合意が近いとの報道により一旦の解決の様相を見せている。今後、合意自体が否定される内容が報じられれば別であるが、そうでない限りにおいては懸念の後退によるリスクセンチメント回復を背景に、欧州株式の上昇およびユーロ相場の上昇をサポートすることとなる。また、今週はECB理事会議事要旨(9月8日開催分)の公表が予定されている。9月理事会においては、現行の拡大資産購入プログラム(APP)の緩和的方向へのパラメータ修正を予想する声の一部が聞かれていたが、結果は現状維持であった。今後、10月理事会以降に同様の修正が実施される可能性は残存しており、公表される議事要旨中に何らかのヒントが示されていれば相場を動かす材料となり得るが、その可能性は低いだろう。緩和的な金融政策示唆はユーロ安材料となり得るがあくまでそれはリスクシナリオと捉え、欧州圏のリスクセンチメント改善によるユーロ上昇をメインシナリオとして予想したい。なお、そのほかの経済指標・イベントとしては、3日(月)に独/ユーロ圏9月マークイット製造業PMI(確報値)、5日(水)に独/ユーロ圏9月マークイットサービス業PMI(確報値)およびユーロ圏8月小売売上高、7日(金)に独8月鉱工業生産指数の発表が予定されている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/26~9/30)の値動き:

(対ドル)	安値	1.1154	高値	1.1280	終値	1.1245
(対円)	安値	112.25	高値	114.18	終値	114.00



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.2850 ~ 1.3050 130.50 ~ 133.00 円

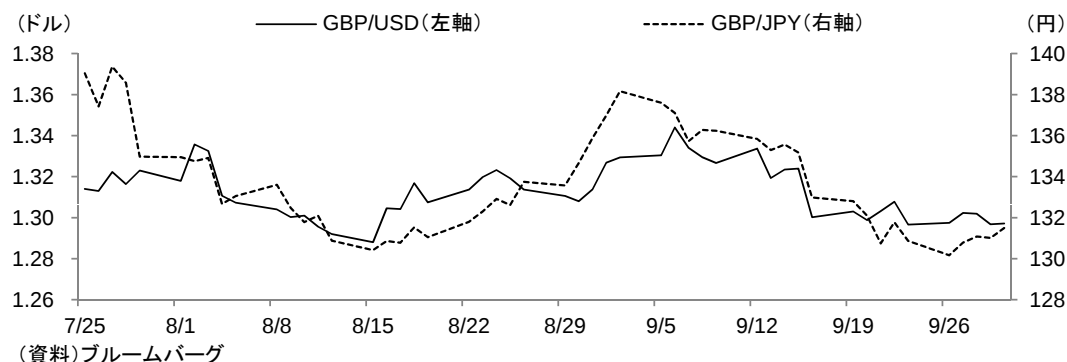
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、横ばい。6月のEU離脱投票以降の安値圏にあったが、対ドル、対円、対ユーロ、いずれも安値の更新には至らなかった。この間、ポンドが安値圏に膠着した背景には、金融パスポートや自由貿易協定の喪失を想定した、いわゆる「ハード・ブレグジット」に対する懸念の広がりがあっただろう。直接のきっかけのひとつには、フォックス英国国際貿易相が、27日、「(EU離脱後は) WTOルールを遵守する」「(WTOルールの方が) EUとの関税同盟(=自由貿易)よりも好ましい」などと述べたことがあった。30日には、大手日系自動車会社が、「(EU向け輸出関税など) EU離脱の条件が明らかになるまで、(英国内の生産拠点に対する) 新規投資を見合わせる」と発表したことが注目を集めた。ただ、フォックス貿易相の発言も日系自動車会社の発表も、ポンドの値動きに直接影響した様子は読み取れず、あくまでも「ハード・ブレグジット」に対する警戒感の強い(ポンド軟調) 地合の一要因として貢献したに過ぎなかったようだ。また、28日には、英中銀シャフィック副総裁が、「年内にも追加金融緩和が必要になる可能性がある」などと述べたが、この発言にもポンドはほとんど反応しなかった。英経済指標では29日発表の英8月住宅ローン承認件数、30日のネーションワイド9月住宅価格、英4~6月期GDP確報値などが注目されたが、いずれも市場予想(GDPは改定値) に沿った内容で、やはりポンドの反応は限定的だった。

今週の英ポンド相場は、引き続き決め手を欠いた安値圏での膠着を予想。この間、金融市場の最大の注目材料であった 米利上げ観測については、11月に米大統領選を控え、当面、表舞台に出てくる可能性は低下したと考える。上掲英中銀シャフィック副総裁は、「11月の英中銀金融政策委員会(結果発表は11月3日)における追加金融緩和の可能性を除外しない」とも述べていたが、英景気後退に対する英中銀の強い警戒感と、現在までに発表された一連の英各種経済指標の堅調との間には大きな齟齬が広がっている。今週も、4日(火)に英中銀金融政策委員会のソーンダース委員、5日(水)に同ブロードベント副総裁の発言が聞かれる機会が予定されているが、英景気に対する弱気な発言や、追加金融緩和に前向きな発言などにポンドが飛びつく可能性は低いだろう。仮に逆方向(景気強気、追加緩和に消極的)の発言が聞かれた場合には、ポンドが反発する展開も考えられるが、そうした可能性は決して高くはないと見る。英のEU離脱交渉はまだ始まってすらおらず、6月の国民投票直後に広がったヒステリックな悲観も行き過ぎなら、足元広がりつつある妙な樂觀が今後も持続する保証も現時点で一切ないからだ。また、上述日系自動車会社の例のように、不透明感が投資・採用手控えなどに結びつくだけでも、成長阻害要因には違いないからだ。そういう意味で、英経済指標に対する反応も腰の引けたものにならざるを得ない。今週は3日(月)に製造業、4日(火)に建設業、5日(水)にサービス業と9月の英各種購買部指数、7日(金)にハリファックスの7~9月住宅価格、英8月製造業・鉱工業生産、英8月貿易収支などの発表が予定されているが、ポンドが大きく材料視する可能性は見込み難い。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/26~9/30)の値動き: (対ドル) 安値 1.2916 高値 1.3059 終値 1.2980
(対円) 安値 129.64 高値 132.44 終値 131.50



4. 豪ドル

為替営業第二チーム 山本 一暁

(1) 今週の予想レンジ: 0.7500 ~ 0.7800 76.00 ~ 78.50 円

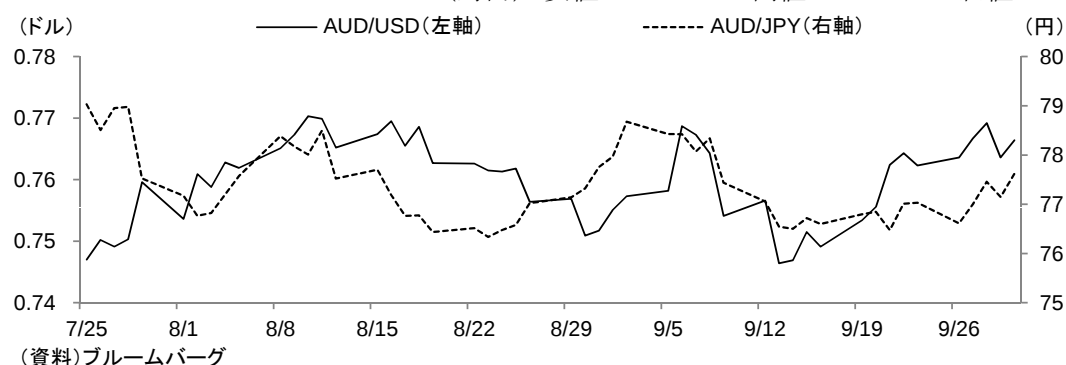
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル/ドル相場は概ね0.76台でレンジ推移した。豪ドル/円相場については週半ばに上昇するも、結局、往って来いの展開となった。週初、0.76台前半でスタートした豪ドル/ドルは、日中は特段材料の無い中で横這い推移後、海外時間で米債利回りが低下し、ややドル売り優勢となったことから0.7649までじり高。その間、対円では76円台半ばから後半で揉み合い推移。26日東京時間、第一回米大統領候補討論会はクリントン候補優勢との見方が多く、市場に安心感が拡がりリスクオンの流れとなると、豪ドル/ドルは0.7695まで上昇。クロス円全般が買われるなか、豪ドル/円は76円台半ばから1円近く急伸した。買い一巡後、米9月消費者信頼感指数が金融危機以来の良好な結果となったことを受けてドル買いが進むと、豪ドル/ドルは0.76台半ばまで、豪ドル/円は76円台後半まで反落。28日東京時間は、OPEC非公式協議の行方を巡り様子見ムードが高まると、豪ドル/ドルは0.76台後半でこう着状態。同協議にてOPECが原油生産を日量3,250~3,300万バレルのレンジまで減らすことで合意したとの報道が伝わり、原油先物相場が+5%強急伸したこと、豪ドル/ドルは一時、0.7711の週高値を付けた。その間、原油先物相場にけん引されリスク選好度が高まったことからクロス円の買いが強まると、豪ドル/円は78台に乗せる場面も見られた。しかしながら、米金融当局より莫大な制裁金を課されとの報道のあった独最大手銀行株が最安値を更新すると、リスクオンの流れが弱まり、豪ドル/ドルは戻り売り優勢となった。更に短期筋のロングポジションの投げも入って0.76を割り込み、一時週安値となる0.7588まで下落した。豪ドル/円についても、リスクオンの巻戻しに一旦、77円台前半まで反落し、その後もじりじりと売られると、一時、76円台半ばまで下落した。週末にかけては、新規の手掛かり材料に欠けるなか、豪ドル/ドルは0.76台前半、豪ドル/円は77円を挟んで方向感なく推移した。

今週の豪ドル相場は、対ドル、対円いずれにおいても引き続きレンジ推移もやや上値の重い展開を予想する。今週最大の注目イベントは4日に予定される豪州準備銀行(RBA)政策金利発表である。今年は5月、8月に0.25%ずつの利下げが実施され、足許は過去最低の1.50%に設定されている。ただ、FRBは12月会合時での利上げ可能性を残しており、その場合は豪ドル/ドルの下落が予想されること、また11月には米大統領選を控えていることから政策手段を温存しておきたいこと、原油先物相場をはじめとして資源価格は底堅さを見せていることなどを勘案すると、今次会合でRBAは追加利下げを行わない可能性が高い。そのほか、週内の主要な豪州経済指標としては6日(木)の8月貿易収支が挙げられるが、RBA政策金利発表という最重要イベント通過後だけに、貿易収支の強弱で大きく方向感が出るような展開は想定しづらい。そのため、原油先物相場や株式相場等のリスクアセット動向を眺めながらのレンジ内での推移となろう。先週の非公式協議の場においては予想外の減産合意妥結に至ったものの、OPECは11月末の次回会合まで産油各国の目標生産量は決めない方針であり、加えてロシアなどのOPEC非加盟国に対して生産上限を設けるように交渉する必要がある。したがって、供給量減少期待を背景に原油先物が大きく買い進まれるとは考えにくく、また、独最大手銀行などの欧州金融リスク、トランプ・リスク、中国リスクなどが依然として燃るなかでは株式相場についても上値は限られよう。ゆえにリスク選好度に振られやすい豪ドルについては、やや下値リスクの方が高い展開を予想する。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/26~9/30)の値動き: (対ドル) 安値 0.7588 高値 0.7711 終値 0.7661
(対円) 安値 76.19 高値 78.18 終値 77.62



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。